



於此うみたる所乃扇せしむ一葉鹿と
梁にの不移る各端中し皆持致る如
金うふ去此定母、此を前しはと
うを免く是の甲乙此轄せざる事と
文の外とをさし終る自然と未水糸
神境と執も一の撰も一の既子
命畱為轄しとも不成此以爲有る
物変化せざるなる道と未人九乃
田子不此く人々軌を回し

此境乃まろ子未離乃菊葉細小
東丈もや海もやと人是と持
波と氣しと宗と未は各馬の
妙なるも、むしきん志る時其終り
若る、此處ハ轄る、此の用となすハ
一なるハ一誰、各親學軌といえん
此意実自在とゆは、七もと
ぬるも亦の如くとも、一と一と
九も是は外題し、若くは未乃

使^ニ奉^ル遠^ク人^ノ心^ヲけ^ル一^ニ
を^シん^ト社^ヲま^シり^テの^心
を^シん^ト社^ヲま^シり^テの^心

外而敏吳扇



華^ノ清^クを^シて^ハお^もき^ニあ^らは^すこ^ノを^シ
共^ニま^しつ^テま^りて^ハ神^ノの^まま^に
ま^りて^ハ神^ノの^まま^に乃^チ大^ニ宮^ニ
ほ^ろか^らふ^ルを^シて^ハま^りて^ハ
何^レも^もあ^らは^すこ^ノを^シ

秋乃木也 神政の了
ま^りて^ハ神^ノの^まま^に
ま^りて^ハ神^ノの^まま^に

元日おはくし神のちりき
柳系乃若く伊勢の節日
ぬ言く神乃山鶴く己能
魚淵 和睡 古懐

整なまきどりのハ浮尾の原
ふんえいきく芭蕉翁も
のたひひりそのち結するつま
又己變金川よせ此つれり
せしりよさふ多ちり此娘
いしをかきあせし神をく
まもり子み何りり差を

あつき見まはまきり
ちゆをいきてるまきり人れ
額突つしちちきり神乃
このおかり

と 籠撮の
神鏡よこも
神板おいつ
すく 槍子ほつ
魚淵 和睡 大懐

お美さ原澄ニ中

一葉庵初會

梅うほふ春あけまりぬ底のよき

梅の底

かく先代の遺書を破り
ふまつたをのくふはく

朝霞はるけくも乃志るる

志るる

響如子の響る笛を吹くまき

吳扇

かりもけくふ人舞あり

柳絮

浅くはるの下のくほさまり

白糸

ぬるもくおと秋のけりハ

荷香

やうふ魚啼月のふ秋川

滄波

志きりよぬもくはる秋風

古懐

そはるは秋戸ぬまはのよけいせ

如思

難きもとめよ秋のつと

蓬戸

魚の袖とれも秋をひもひきけ

魚網

月かしくはる秋のけりハ

和睡

はるはれ古河のけりハ

翠溪

田中の松と凌香のけりハ

如髮

何ふ人の撫さし多かる結刀

紫雪

この時も架まは怪りながら

風之

車坐のくも夜月まじりて

芥鷺

潮の音、小瀬乃秋

白江

鶯鶯はあちちを怪りて

瓦石

僧もまじりて素良の大寺

夜雪

嘆かると見やふ指の意はいま

魚吹

暑乾ぬるあはれまの虫

魯山

まよひてむらさきに葱子田隈あり

汝章

も水くまを流すの子と居

夜舟

不ろ聲はれりてさしりて編まり

春城

ゆふ日子瘦しをたはしりて

何雪

日移りて垢粧をりて赤茶あふ

看江

飢しお唇れをみまきりて

鳥跡

筆塚乃ち良をりて二月に

泉石

後志をく夫妻おしき

玉蓮

休所御とぬきしを赤茶あふ

白調

桐の葉の白きくも張

英如

結ぬていさむら八次のもさみか相
 ちきよんていしつ後親とこむ
 傾城よむまをさむおのよのほりま
 ころつらやうまをり結より
 すまはら棒の程のちちき
 ゑき放るの浦ちりてん
 海くそ縁のあらをかきま
 次の中遠くひくしと信
 新ひあふ阿佛ハ教とまむき

去る尾
 倉波
 乙城
 如思
 風之
 魚吹
 蓬戸
 魚刺
 和睡

けうきふのうらねやまの解
 空く一室のまもるぬりの子
 氣のつくおりか気まらたま
 後夜のと出れつと絆あま
 井のぬりの竹まきつまる
 魁の戸まきりま咽をぬり
 言まきま藤ま其る暁
 西くと結おし湯のき角鹽
 三人かゝればし一年の海

汝章
 如髮
 吾石
 白江
 去城
 魯山
 翠嶽
 度舟
 信馬

女夫一とあつての昔まつての流り
 彼岸うねるこゝろにわらき
 そりもよみしりく一絶屑
 この水橋は月あつた
 小池の傳言の秋のやぶる
 中まぐ教のつらうき
 常うとあつた二宮院
 中まぐ教のつらうき
 金持乃とあつた人まうき

休市
 芥馨
 柳絮
 与尾
 倉波
 魚吹
 自山
 大嫌
 如思

子やゆき孫達の聲
 手くさるる酒酔子
 手くさるる大宮乃影
 又れ二見とあつた花の
 那夫の髪とあつた柳のい

若香
 魚淵
 私晴
 毛蓬
 執意

三月二日

響や多し〜 杉り乃小無り〜
 一〜 籠すま葉を葉子階の素
 響もれも〜 一 糸坊主
 う九じきよホと〜 人のちぬき
 響や 響よまてハ 鈴不らき
 一〜 一 葉のひとものよお比工尾吉
 響の〜 一 ぬお 如思 如邪
 如思 風之 星白 花陽 芥響 江 高兵

人日

七 仲の芥の音ぬまぬぬふ
 魚刺

七 種ぬ篠まをを 無〜 一 種
 ち〜 一 きの松子はまきあ〜 矢の邪
 鈴の音よ 摘てき 籠〜 一 きの小
 けふ 脚ぬま 出て見ま 一 葉の真
 大 籠のま〜 一 籠ぬ葉の素
 一 籠ぬて ぬゆ〜 一 籠ぬて
 響 響ぬゆ 一 籠ぬて 籠ぬて
 ぬま〜 一 世乃瓦を 出ぬぬ葉の
 出ぬぬ〜 一 籠ぬて 籠ぬて
 高兵 江 花陽 星白 風之 如思 魚刺

柳

きのいハぬ人のまゝな柳の
 甫自てきふと口まゝ柳の南
 ち柳の柳の細くの岸の
 けし場の敷きくはる柳の
 つ香の眠ふ軒くはあまの
 夕暮を志くしちつま柳の
 庭掃とそまをらさる柳共
 芥馨
 石局
 鹿
 泉石
 停馬
 何雪
 壺仙

三島

大なるは女用ありきゆわのすま
 遠浅は小貝りりあやうあ
 何しき糖様よりあまの
 ちあまのゆきし一のあま
 干酒のうらぬき疾きあま
 すきまの十けし十のあま
 那まのまをた梵海のはちあま
 若香
 風之
 蓮戸
 翠溪

藤

藤は子藤の入りあふる
 和睡


~~~~~おまふのしとすふ傘の下  
春もたかく香もたかく襟のしるり  
けいけいの撫ふもあふ衣襟も  
際くまもつらつら小弓共  
てしつらぬおぬおぬを裾まつく

陽火

陽火のや履半びく磯の日のさ  
うもつらふや春紫こあふ石の  
陽火の磯のしるり細の中

豊原

如髪

菘菜

子得

翠溪

乙達

魚吹

翠溪

白江

ゆきや岬のゆ乃引きぬじ

紫雪

春句

陣まきりても藤つきてまの  
まのやふらふにけの車あ  
永撫ゆ鳥のゆゆむねのゆ  
まふゆめゆみゆも古ゆま  
不化寮やゆゆらふ春のゆ  
かくゆまもまの川うまの  
川島のゆゆのまのゆ乃雨

豊原

春江

塙ト

扇

私睡

如思

乙達

石



来る白の澄かをすしのぬきり  
春の白の澄かをすしのぬきり  
春の白の澄かをすしのぬきり  
春の白の澄かをすしのぬきり

総月

きーるのこえはしるは総月  
京申の幸加繁のこえは臆月  
形境の松きいしくかゝる

古憶  
吹暮  
如髪  
柳絮  
芥馨

如思  
盤工  
槎来

おろけ月のお影の影下のま木は  
総あゆみとあまはを根穀垣  
けりおとととむふを総月

風中

入海のお法下やいさのいさの  
下京や車をもあま思風中  
大教のおゆるま〜鳳巾  
いさのいさの神の志〜帆さう  
大板のこり〜紙書

翠溪  
休市  
古憶

泉石  
和睡  
蓬戸  
夜雪  
何香



芥

乾夕の陸海多れ芥の花  
芥めまや酢を買ふ山山と  
芥つゝの古まけを流しり

魚創  
母章  
如思

雪解

雪解お地ま暮乃孫庇  
一撮子塔のくまりの雪解お  
ふまけおあはく川のあつ湯

去る尾  
和睡  
蓬戸

のの物

ふまけの表を干きり秋の物  
のの物おと食の粒おのま  
あまやゆゝ後の書院先  
けいふや麻やとまのさくま  
若物やるの何の長つゝ  
けいふおあつゝおまハ枕

古懐  
乙達  
白山  
榎来  
笑雪  
弓扇

廿数入

やぬりのぬりふりお脚中  
あよりお積ふつゝぬりお

滄波  
柳絮



おぬいりや日光膳のほりき  
かき入るまき提籠の鼻まきり  
中よりり母の教見のりりり

梅の恋

中川流しき聲ありき梅の恋  
戸をぬきさかちやりの福この恋  
庭まて是く鈴も片く梅の恋  
福この恋月よりあめくやつきふ

長閑

もみさやあふもゆし 扇の恋  
のりりり柳の恋乃る恋  
もみさやあふもゆし 扇の恋  
のりりり柳の恋乃る恋  
もみさやあふもゆし 扇の恋  
もみさやあふもゆし 扇の恋  
もみさやあふもゆし 扇の恋

田原

もみさやあふもゆし 扇の恋  
もみさやあふもゆし 扇の恋  
もみさやあふもゆし 扇の恋  
もみさやあふもゆし 扇の恋



苗代の靱よき里と田うね  
れとひんた並木の陰の田隈啼  
翠溪

陣

つゝつゝやをぬり博の南  
いふつゝ又啼出まかり川の系  
陣啼ゆる小の解ぬの目ぬる  
園の夜は約鐘なく陣ふ  
ととくはたぬく言のころ川の  
気とぬあとも鳴る川系徒う車  
魚香

豊

扇  
柳絮  
魚刺  
度雪  
如雲

ふそろ七川あうりや啼る川  
一鉄と極の陣の南  
の暮るり川鳴きりぬり色  
陣かくや馬わらりふまし里  
小意り陣起きままうり  
外や河た活のももふく陣  
階子田の陣啼る川の月  
魚吹

魚吹

己達  
己城  
子得  
古城  
度舟  
泉石  
如思



其の如く石所手にてと結ま利  
とふ風やゆきゆく度神楽  
ふくくくくくくくくくくくく  
春の勢ゆるふのふりりふ暮時  
扇

向をふふ木端飛きり暮神  
たしきゆく古童の所をくくく  
大寺の結まの趣のくく結ま  
ゆりりやうく結まの跡の暮中  
如思

ぬききくくくくくくくくく  
礎とふくくくくくくくくく  
有素まつくく結まの暮の素  
壺心

籠子

名角をくくくくくくくく  
きくく声脚の響をくくくく  
きくくの声山暮やうく暮に  
いくくくくくくくくくくく  
きくくくくくくくくくくく  
度雪

豊原

か調

柳絮

柳絮

倉波

玉鏡

扇

暮神

暮神

泉石

如思

千鯉

魚淵

壺心

芥馨

如思

扇

か調

度雪



形紙も旅のいさむ程のうき  
城河の又おぬきしきの聲  
きし来なく脚色お放下の二枚表

茶の花

ふのよみおをるうまさかき  
茶の花やねきまらくるほり  
ふろふかやきぬのちり  
茶のよみおのちり

燕

燕やれかーとてぬま控小ぬき  
り〜と翅のかくし鳥の南  
る鹽の跡まじりけを先引  
つ〜のまらか〜て〜色  
まらおぬきはまら早  
燕やれか〜河ハ勝る軒う  
巻まぬま茶〜の燕〜り  
け〜〜乃〜

茶

和指

芦帆

翠溪

達戸

和睡

浴溜

何雪

滄波

弓扇

魚尺

古懐

何雪

土壺仙

如髮

柳絮







恒子結し〜種もくおみ椿  
家小少川埃の中や赤はきき  
壺仙

心魚

去る魚ゆか〜ゆふなく目の思き  
去る魚火ユ大ふ様〜つうひきり  
心魚乃消もまのなき舞う如  
魚吹  
如睡  
魚須

心魚

心魚乃消もまのなき舞う如  
心魚乃消もまのなき舞う如  
待纏のま〜ゆき〜り小魚は  
吹暮  
汝章

魚角

夕暮ユ木のくま〜り松〜角  
里急や岸の申〜のか〜角  
魚園  
蓬戸

魚の月

鴨〜の〜の東〜ま〜の魚の月  
民豊〜ま〜の〜の〜の魚の月  
魚扇  
去る尾

心魚

小松ひきま〜心子〜の〜の魚の月  
倉波



其の脚の伸の中を敷板ゆり  
其の口と海王くく粉の老  
とふのふちりく膝の本をあら  
蒲ふらふ板のほろふと方ふ那  
院くは傘干つる木の舟ふ  
るの葉やまの枝へ髪とく  
おくわ色もぬまのこころ  
去るまの空のそつまの枝のま  
ぬまの十のそつまのこころ

吾石  
魚吹  
看江  
柳絮  
去る尾  
蓬戸  
龍渚  
英如  
去る尾

のさくくくくくくくくくく  
細くくくくくくくくくく  
長き日か海へちりくくく  
美草の米の中よりぬまの

柳絮  
吾石  
魯山  
芥子

くくくくくくくくくく  
其のくくくくくくくくく

又

けくゆわあはのきりくも麻さ  
こく其をかくも柳の日数代

豊原  
西山  
新山



くまの堀のこくり子燕の春  
夫をたもく備一菊のワも根うね

ほいさし

上村 宗白翠  
伊勢橋 吳外

梅の香を嗅と免しあひ方玉里  
くねるの和玉の去をかくうん  
木の枝やゆをうもくそま  
けうそまわくそまの二火のちうまき利  
尾まの軒まき流しき柳うね  
近さおあをたふしハ流うす

早馬 沖天  
大口 市秋  
松坂 煙る  
八鴨  
豊原 嶺仙  
豊原 溪橋

ワの仲や脊戸をぬきかきり形  
峰の暮く系小田のぬりり  
長閑さや花中入んゆさる士的心  
くまの堀を帰くりまぬりたり  
長閑さや花中入んゆさる士的心  
傳出せとぬアむもりり  
珠の香乃そまの柳ありおの梅  
石の香をたふしハ流うす

おのめーこの外あまはまりをいひ出  
人たふしハ流うす

春槎  
文十  
丹生 九鼻  
鎌田 壺田  
松坂 麦仙  
南亭  
柳司



重き重き見し口ふのまゆ  
ゆきゆき石のまき 踏野うら  
雪の音きつ音の書あ戸ぬ 掃の虫  
梅はくや台屋のくしの人出入  
羽水  
冬羽  
如扇  
梅鞞

ちる尾坊のぬー吾四己百のまふれ  
一とふた履の再撫をうらぐを原の  
つあり 塚塵せまきのくみ法うん  
陵敷は 洛敷のせらうまれを世を

不里のふま音めふふまきあはを  
彼川髪を鞠に投一肝後う練の  
功まうま時雄の就剣とそは  
公案き練色の鏡か鏡をのく  
色あまのさし

春興  
梅を撫  
坐後

不のくま板の中は 摸うを  
る繁く町を出るの ぬ跡は

かく東武をうらや

二十五



暮をく 吾ゆ 性の輝をあらす  
既子枯跡を多様一或ハあ裁の二隅を  
占む 是をさへほめるのをさきよれくはを  
多れく 是を 踏りて 是の中より  
這出まの 浮名とて 是を 及 蝦蟇  
時の 甚しき 涼と 嘯 見 此  
彼 脚 舟の ころも ころも 甚 甚 甚  
吊り 舟の ころも ころも 甚 甚 甚  
見 舟を 関を 舟を 祖を 夫ありて

て 地 如 地 如 の ま け け け け け  
景色 如 如 如 如 如 如 如 如 如 如  
桑 樞 陋 巷 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
揺 曳 中 中 中 中 中 中 中 中 中 中  
毀 譽 也 也 也 也 也 也 也 也 也 也  
舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟  
さ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ

萬竹舎  
己達



又通

四季混雜

三十一

白きく花屋のつら柳の角  
心よわいの神ものちいれはるる  
何きくくは子いふの春の空  
磯際を氣物のはらむは日か

ト居全

鈴敷ねりうきおふくまのぬー  
芦の子牙をぬくきき一降る如

江戸

つ瑟  
秋瓜  
字石  
柴居

尺己  
鼓水

続 月川をききる乃と聲ももる  
はこしきかふまきも見ゆる小春は  
夕顔お自然の尻のほくは紫  
く川秋やいより起る小僧も  
小糸女のま拭き後きつるふ那  
所盛ちま出りりき刺梅乃ま  
新葉かきまのちまを様ふ  
証のきくくはまおれおる  
市中おきの下ゆく水のき

京

大坂

私泉

篠豆  
諸九  
子風  
又下  
寸馬  
棠坡  
東楚  
泉明  
吳一



梅の香や留まらば辰を牛をり  
 家も煙の夕暮いりしものまのる  
 しののけささくはなをりし月  
 何れはきよ人なす梅やたけ月  
 雪や柳を縁もぬりしき  
 鼻何れをさす梅を梅の香  
 何れの日乃系もきし柳の影  
 山岨の棟つらきもまよる  
 何れもさすものさすを梅

伊勢  
 之  
 麦收  
 浮石  
 二日坊  
 民古  
 坐秋  
 入楚  
 桐る  
 みる

旅人の梨もいしきのし脚の如  
 きのふり又きの帰るる梅の影  
 しのぬを見ても梅を柳の影  
 筆の目もいしきの梅の影  
 水もやわらしきの梅の影  
 ぬ、何れは梅の影もいしきの  
 水もやわらしきの梅の影  
 暮るる梅の影もいしきの  
 ちりも梅の影もいしきの

僧  
 李  
 松舟  
 松舟  
 東巴  
 書橋  
 平居  
 又々  
 魚生  
 山堂







ひるふち牛の使りてしふき

秋後 鷺大

きしちくおきいぬく父たまのほり

一 立音

然あゆ仲崎一きまら様よりり

秋中 汪由

月何く様もる夜の澄み

る 丈

二之段も馬川久き暮るも申

秋糸 ト市

此音の垣よりくちらるかして

池川

物のはら杖の音さお友の如

池川 吉岸

川もちちねふしはるけしり

智丸

素のふおちりつて夫女のまはる

左人

日室中の雪のち居のほり雪

木下

あふおの市は端のきぬらまの

巨山

梅はくや木の音も透て林の色

可英

け、物おろつるまて何ふ秋のほり

夫人

然月とくしぬ水もりまきり

に戸 暮原

き解や何くまわくもさぬの

吉盛

苗代の水張ふもくもまらふ

思今

ふハ一海のきの子り婦おれ清美

比助

昔ちく入るくぬの場り地

采古







わしきすをいつく何きりのお音は  
花の何ふ村とていつく山一節と  
ひき捨て牛のこゝろを野梅ふ  
千本言ま中よ文よと柳う糸  
陽空の様よおとふ松う毛と  
琴の音よ八棟中し一純月  
まの白の鹿一あきふつり子り  
蕨の爪折傘と踏まりり  
響る乃を幹と刻るまゆひ那

八巻  
吟山  
楚川  
西風  
李井  
砂埭  
振る  
映雪  
一巻

信濃

秋

むし海舟一尺もゆり梅の花  
くく花すの端も何れも初音小  
安よのり中し花の小柴垣  
きし啼て山を鈴森のりり系  
小糸う小糸つりおあうる  
流き直よ折折を見ふつり糸  
旭の目の折了おあまの小を御  
淡川のお田原のりり啼る  
おと音やう鹿るよ糸

雲和  
見丸  
交琴  
素園  
白唇  
批也  
後川  
佛心  
糸尾

尼

か賀

糸











梅、まやちのひくーと敏し  
陣陣おれお端出しし藤入り  
夕暮や言ふいふ飯の素椿  
ふるる忌のおと食ハハのつれ  
をさくし物のこゝろが松の雪  
玉月の白菜種のおの流きり  
ゆつららおとくさるりき林の  
松樹をりしと維せれお月  
はくを新葉ありて部一

自来

随和

麦語

荻子

白羽

双鯉

干苔

雪浪

鴉心

甲斐

信濃

四阿、娘歩一入やむ光の  
と熱風おきあきくゆの松

相柳

草

梅、ま乃ぬらしとて草の

大梁

春柳、やとぬらしとて草の

夜松

物の中、よし居やしとて

梅止

くく飛すやよのよよりとて

松

雪、おさけしとて松の

止嶮

然夜やとぬらしとて草の

兔石

くく飛すやよのよよりとて

眉丈

下総

上総







新宅の糸をほりかゝる昔庵は  
 何ちきかく脚はかく菊のふしは  
 けしき家何そこ家やし、のさ  
 青板やあしよ老木の卑下多き  
 大啼て月能きおお梅のさ  
 おの梅燭臺清くそ白ひりり  
 月能き遊そそ遊いそ  
木曾  
 水音よぬきそ藤のにおそ那  
 出さうりやこちきおまきのさ袋  
 淡子  
 如ト  
 如做  
にP  
 芦洲  
 抵る  
 大響  
 巨計  
 善成  
 菊人

膝くのぬりぬきそ中ぬき  
 おかー田田際の聲もあまは  
 花のにおとのもそ角やう  
 節堀りしも雀の巣もあは  
 雪乃おの鉄炮みく見そ  
 雪うけ水のこして雀前を  
 擠のうや何ほくはく何向  
 揺やおも能えくお神まうて  
 ねさうり子埴生いし不輝あり  
 相種  
 新父  
 長江  
 斤雪  
 信成  
 信成  
 有華  
 志仙  
 林子  
 扑之

三十一











川秋お川橋のうさ一甲塚  
 梅咲てきふうも又日如お  
 乙日白かきくふ系馬の面  
 おもきう板の方定き十夜分  
 春の日はちきくく遠眼鏡  
 何〜〜きおくお柳の車  
 響るやゆさお木も出たり  
 拿張〜〜く法とまのめ  
 濱さ〜〜の〜〜の苗

松尾  
 秋光  
 吳川  
 松葩  
 其笛  
 羽赤  
 南島  
 禮水  
 乙燕

夕あ〜〜と程まりりも〜〜乃暮  
 嵐ハ大佛の巻見やうき架  
 泉之  
 仁左

四時

空解ちると程も〜〜り  
 舟の子お隣〜〜も  
 ときおやあさ〜〜も  
 と後〜〜九折〜〜も

百如



雲の巾裾の木刀ニ之本 芋丹

瑞福のつゝとこの様より

乾乾の河の時のりの小糖の

燈ゆと出たまふこのひらね

き〜峰や鈴日のつゝ西色に 唇の

つゝ〜系と居あてぬこの時より

〜山一お枝の笑おふゆき

つゝ〜雲や河のりの〜  
石燈籠



字尔菴あり一葉庵と呼ぶこと也

多る近きれ〜老中逢い遊戯と〜

あ〜〜志事〜お喜おれ〜

手裏〜〜人曰〜〜

花〜〜〜〜と通志也

半れ〜〜お繁と括〜〜又場お獨結を

つゝ〜〜おあ〜お舞せん〜おあを



和漢のハ詩人なりと傳ふるハ稀ニ  
シテ其ハ支と志とハ乾坤ハ強弱とハ  
代々乃チ變化とシテ能安と云ハ人  
ノ大鵬ハ野鳥ニシテ毫末ハ羽  
ニシテ滑龍ハ蛟トハ云ハ公能申  
クシテ其ハ龍ハ一統と云ハ  
ウシテ其ハ德輝と云ハ  
と云コト女ノ中ニモ有リ

天仁遠遊と云ハ西ノ人東ニ出テ  
吾哉乎也と傳仰ト云ハ久シ  
おのつゝ其ハ其ハ文字ト云ハ  
吾曰俗ノ外ニ有リト云ハ  
標張ト云ハ其ハ其ハ其ハ  
中ノ其ハ其ハ其ハ其ハ  
少シク其ハ其ハ其ハ其ハ  
困於其ハ其ハ其ハ其ハ



くまも口と辨る浅とまのういふ海

いせ松坂

徳月橋陰波

明和九年

壬辰仲夏



橋屋流音流梓

京寺町二條下町



記  
記  
記

の  
の  
の

の  
の  
の



